

これまでの地域協議会等での意見

① 県立高等学校みらいのあり方検討委員会

- 小規模校は個別最適な学びを実現しやすいが、一方で、同年代の多様な人間関係の中で社会性を育てていくという点などは担保しにくい。
- 高校の志願状況を踏まえると、地域の子どもを同一地域の学校に進学させようとすることは、地域の子どもや保護者の教育要求に必ずしも適合していないと考えられるため、施策の方向性を変えていくべきではないか。一方で、都市部の学校にあっては、その周辺地域も自分たちの地域であるという観点で、都市部から周辺地域の活性化に貢献していくことも検討すべきではないか。
- 小規模校においては、子どもたちのニーズに沿った多様な学びや高校生活を提供していけるよう、これまでの取組を検証した上で、存続か統合かを考える時期に来ているのではないか。
- 小規模校を活性化していくためには、限られた財政的・人的リソースをどのように確保していくかが重要であり、都市部の大規模校の定員数を減らして、その分を小規模校に配分していくことも考えられるのではないか。
- 今後、一つひとつの学校がさらに小規模化していく中で、複数の学科を併設することのよさを考えると、専門学科の統合も考えていく時期に来ているのではないか。
- 高校に通えない地域が出ないようにしていくことが統合にあたっての前提である。また、生徒の過度な通学負担等があった場合にはサポートする方策を考えていく必要もある。

② 高校生アンケート

- 高校に入学する前、高校に対して期待していたことは、「将来必要となる資格や技能を身に付けることができる」(38.1%)、「大学などに進学するために必要となる学力を身に付けることができる」(29.3%)である。
- 現在通っている高校を選んだ理由は何ですかは、「学びたい、または 興味・関心のある学習ができる」(32.7%)、「自分の実力にあっている高校と思った」(26.0%)である。
- 現在通っている高校での生活に「満足している」、「どちらかといえば満足している」と回答した理由は、「友人や先輩などと、よい人間関係がつくれている」(43.8%)、「楽しいと思える授業がある」(35.0%)である。
- 現在通っている高校での生活に「どちらかといえば満足していない」、「満足していない」と回答した理由は、「楽しいと思える授業が少ない」(50.3%)、「部活動が楽しくない」(18.9%)である。

③ 学校別協議会

※ 平成 29 年度以降取り組んできた活性化取組の総括的な検証を実施

- 少ない教員数の中では、選択科目の充実や組織的な進路保障のための指導体制づくりに課題がある。また、部活動についても設置数や団体スポーツ競技に挑戦する部員不足など生徒の活動が制限されている。
- 今後、地域を担う人材の育成に向け、生徒一人一人の多様なニーズに応えることができるきめ細やかな教育活動を行うためには、学校単位の取組ではなく、地域全体を見据え、適切な学校規模と配置を協議・検討していく必要がある。

④ 地域別活性化協議会（伊勢志摩、伊賀、紀南）

- 中学生が学びたい、保護者が学ばせたいと思われる高校でなければ生徒は集まらない。少子化に伴って小規模化がさらに進むことで、ある高校では進学に必要な科目の講座を開設することが難しくなったり、別の高校では多様なコースを設置することができなくなったりと、地域内のすべての高校が活性化できなくなってしまうことを危惧している。高校の再編統合を通して子どもたちの学ぶ環境を整備していかなければならない時期に来ているのではないか。
- 高校の再編統合を考える際には、生徒の通学状況や交通機関の状態を考慮に入れた配置をすることが大切である。
- 小規模校の取組や教育内容は素晴らしいものの、様々な生徒の学びのニーズに応え、より魅力化するためには、高校には一定の規模が必要である。
- 小規模校の取組は魅力的であるが、入学者の状況から判断すると、子どもたちに選ばれていないのが現実である。高校には子どもたちが希望する学びの選択肢があることが大切であるため、高校を再編統合していくことはやむを得ない。
- 高校の再編統合を進めるにあたっては、県内唯一の学びであったり、地域に少ない学科を維持していくという視点が大切である。
- 少子化の中で小規模校の再編統合は避けられないが、小規模校が実践してきた地域学習について、地元愛を育てる特色ある地域の教育として残していくことが必要である。
- 小規模だからこそ通える生徒が一定数いることにも留意すべきである。再編による高校活性化を考える際は、配慮を必要とする子どもたちのことを考え、行き場がない子どもをつくらないということが公立学校の役割であるという認識が大切である。
- 基礎学力の定着や通学困難生徒への対応、少人数教育による丁寧な指導など、これまで小規模校が担ってきた役割を、「誰一人取り残さない」という視点に立って、今後の地域の高校の再編統合後も継承していく必要がある。また、今まで培ってきた小規模校の学びについても例えば I C T も活用しながら継承していくことが必要である。

- 子どもたちにとっては高校進学に際して高校を選ぶ選択肢があることが望ましい。統合すると地域に高校が一つとなってしまふ紀南地域にあっては、子どもたちの進路選択の幅を残すために、例えばひとつの学校に統合の上で校舎制を採用することを検討できないか。
- 小規模校は活性化に一生懸命に取り組んでおり、地域にとっても高校の存在は大きいため、高校の存続を望んでいる。しかし、子どもたちの学びを考えて統合となった場合には、通学困難な生徒に対して例えばスクールバスの支援等も検討してもらいたい。
- 地域の中学校から多くの生徒が都市部の高校へ進学する理由は、地域の高校に魅力がないのではなく、小さい時から同じ人間関係にある少人数のグループから少しでも多様で多くの生徒が集まる集団で社会性を育みたいという生徒や保護者の意向があるからである。今後も地域の小規模校がより特色化を進めていくという方向性のもと、県外からもより多くの生徒が集められるよう入学者選抜の改革も検討する必要があるのではないか。

⑤ 教育改革推進会議

- 平成から現在にかけての中学校卒業生数と全日制県立高校設置数を見ると、生徒数が半数近くにまで減少した一方で学校数は 62 校から 54 校と 13%程度の減にとどまり、この間の生徒数減に対しては学級減で対応してきたことがわかる。三重県の県立高校の規模と配置の問題は、これまでの対応の結果として高校の規模が小さくなった現状についてこのままで良いのかということであり、これまでの方針を転換することを前提に、人間形成の場としての学校における生徒の学びや教育の質をどのようにしたら維持・向上させていけるのかという観点から、今後のあるべき形を考えていく必要がある。
- 小規模校は生徒一人ひとりに手厚くできる一方、教職員が少ないために公務分担の負担が大きく研修機会も確保しにくい、部活動も制限されてくるといった面がある。高校だけでなく小中学校においても、集団の中で人間性や社会性を育むといった学校の機能を果たしにくい状況が出てきている中で、子どもたちの真の学びを考えた場合、学校に一定の規模は必要であると考えられる。ただし、地域における今後の高校の在り方を検討するにあたっては、山間部等通学困難な地域の子供たちのこともしっかり考えていく必要がある。
- 子どもたちの学びにとって一定の学校規模は必要であるが、望ましい学校規模については、「1 学年 3 学級から 8 学級」よりもう少し大きな規模が良いのではないかといった検討も必要である。
- 10 年後を見据えた場合、都市部の高校の小規模化についても考えていく必要があることから、都市部の高校も含めた望ましい学校規模や具体的な高校のあり方などを考えていく必要がある。
- 高校生を対象としたアンケートの結果を見ると、友人や先輩、部活動など多様な価値観の中でより良い人間関係を築けているということが子どもたちが高校生活に満足感を得る大きな要素となっていることがわかる。こうしたことをふまえると、子どもたちが一定の人数の中で学んでいけるようにしていくことが必要ではないか。

- 小規模校におけるきめ細かい指導等に魅力を感じて入学してくる子どもたちが一定数いると考えられる中、小規模校を他校と統合して一定規模の新たな学校を作る場合においては、こうした小規模校の学びを求める子どもたちのニーズに応える必要がある。
- 小規模校も含めた今後の地域の学びや高校のあり方を考えていくにあたっては、地域活性化協議会等の場において、当該地域の各高校の特色をふまえた地域総合的な議論を行っていくことが必要ではないか。
- それぞれの小規模校にあってはこれまで活性化に一生懸命に取り組んできていただいた。しかしながら、入学状況を見るとほとんどの高校が地元の子どもたちから選んでもらえる状況にはなっていないのが現状である。がんばって取り組んできたのになぜこのような結果となっているのか。地域に学校を残したいと考えている地元の方々と、子どもが志望校の選択に迫られている親・保護者との間の考え方の相違、世代間の意見の相違があるのではないか。こうしたこともふまえながら、地域活性化協議会等において当該地域の高校のあり方について検討を進めていく必要がある。